

1-7					
主題	とりあえずやってみようを合言葉に地域共生社会に向けてゼロから企画・開催した地域交流イベントの実践				
副題	地域と江東園が繋がる地域交流イベント「園むすびの会」の取り組み結果とこれからの展望				
キーワード 1	地域共生社会	キーワード 2	繋がる	研究(実践)期間	27ヶ月

法人名・事業所名	社福) 江東園
発表者(職種)	畔蒜浩平(機能栄養課課長)、入澤紗生(管理栄養士)
共同研究(実践)者	大西揚士(機能訓練指導員)、野添大輔(機能訓練指導員)、木内麻美(管理栄養士)

電話	03-3677-4611	FAX	03-3677-4655
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	当法人は日本で初めての幼老複合施設として、1962年の誕生以来、現在0~102歳までの方が同じ屋根の下で生活している。機能訓練指導員と管理栄養士から構成される機能栄養課では、特養や養護、保育、緩和型通所介護等の利用者に向けて、身体面や精神面、栄養面等から支援している。今後も様々な活動を通じて地域に貢献し続けていく。
-------	--

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

令和4年、東京都江戸川区の65歳以上の高齢者は147,534人と全体の24.1%を占めており、今後も少子高齢化に伴い増加する傾向である。社会福祉法第24条第2項より、私たち社会福祉法人職員は地域貢献活動を行う責務が課せられており、私たちの課でも他課からの依頼で地域に出向いてイベントを行っていたが、地域貢献活動が一方通行であり地域住民主体の取り組みができていないことが分かった。また江東園の認知度も低く、課独自として十分に地域貢献活動が行えていないことが分かった。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

本実践では課独自で地域と江東園を繋ぐ地域貢献活動を行い、地域住民主体の取り組み実施を目的とした。近年、介護予防のニーズが高まっていることもあり、予防に着目した専門的支援や参加高齢者からボランティアを募り一緒にイベント開催することで、より地域住民と江東園が繋がり、集いの場など今後の地域住民主体の取り組みや介護予防に繋がると仮説した。また定期的にイベント開催することで、ボランティアや活動参加の習慣化に繋がると考えた。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

地域と江東園を繋げることをモットーに地域交流イベント(以下、園むすびの会)を1ヶ月~数ヶ月に1度の頻度で企画・開催し、内容として①江東園を知ってもらう取り組み②地域ニーズに沿った内容提供③ボランティア依頼を実施する。①江東園を知ってもらう取り組みでは、開催に向けてチラシ作成し区役所や区民館へ設置、また各町会の地域活動へ出向き宣伝活動を行っていたが、江東園を知らないという声が聞かれたため、開催を江東園で行い実際に地域住民に来ていただいた。また江東園職員を知ってもらう取り組みとして職員紹介ポスターを作成・掲示し、地域住民と交流するきっかけ作りを行う。②地域ニーズに沿った内容提供では、はじめに地域住民へ生活で困っていることのニーズ調査を行いその結果、認知症予防、栄養、体の痛み改善が上位に挙げられたため、月替わりに体力測定や骨密度測定、認知症予防、栄

養講座を企画する。体力測定では握力や片足立ちテスト、5m歩行テスト、椅子立ち上がりテストを行い、全身の筋力やバランス、歩行能力を測定する。骨密度測定では江戸川区役所より骨密度測定器をレンタルし、来場者の骨密度測定の実施、その結果と体力測定の結果から自宅でできる体操を伝達し機能改善を促す。認知症予防では、認知症の原因や予防方法の講義、脳トレーニング、運動体験会を実施し、また近年、認知機能予防に効果が期待されているゲームを用いた e スポーツを活用する。栄養講座では管理栄養士監修のもと、栄養バランスや適正量についての講義、レシピ提供、食事カードを使った献立作りを行い、地域住民同士で意見交換できる場づくりを提供する。また各イベント終了後は、満足度やニーズ調査を目的にアンケートを実施する。③ボランティア依頼では、地域住民にイベント運営に携わってもらえる方を地域住民や園むすびの会で募り、15名の参加希望があった。具体的な取り組みとして来場者の受付や誘導、資料配布、体側測定記録など、本人のやりたいものやできることに合わせ提案、実施する。

#### 《4. 取り組みの結果》

令和4年4月から令和6年6月現在までに15回開催している。①江東園を知ってもらう取り組みにより、江東園内の他事業所のことや取り組みを知るきっかけとなり、江東園の認知度向上に繋がった。また職員紹介ポスターを作成したことで地域住民と職員が交流するきっかけとなり、名前と呼ばれることも増え職員の認知度向上にも繋がった。②地域ニーズに沿った内容提供により、参加者から「毎日の運動や食事を改めて考える機会になった」と前向きな声が多く、自身で気づくきっかけとなった。参加者においても平均28名と安定した動員数や口コミの評判から新規獲得へと繋がり、令和6年6月時点で合計426名が参加される。また実施後のアンケートより平均満足度98%と、「とても学びになり次も参加したい」との声を多く頂いた。③ボランティア依頼では初めての参加に不安を持たれた方もいたが、本人のやりたいやできることを中心に依頼することで、自ら率先して行動される様子が見られた。参加後は「自分にまだ出来ることがあると知れて良かった」とボランティアを通じて自信に繋がった方もおり、現在も継続して参加される。しかし職員主体で運営することが多く、地域住民主体の活動には至っていない。

#### 《5. 考察、まとめ》

地域ニーズの聞き取りからテーマ選定したことで、地域住民の知りたい・聞きたいことに合わせて提供でき、予防に着目した専門的支援に興味を持たれる方が多くいたことが分かった。定期開催したことで参加者数も安定しており、地域住民にとって集いの場として定着していると考えられる。ボランティア依頼では本人のやりたいやできることに合わせて依頼したことで、主体的に動かれる方が多く、本人の自信にも繋がったと考えられる。地域住民主体の活動に至らなかった要因としては、職員から参加者に伝えるという内容が多かったことが考えられるため、今後は参加者同士がより交流できる園むすびの会となるよう、企画からボランティアに携わっていただき一緒に作り上げていく。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

- 1) 「生活期におけるリハビリテーション・栄養・口腔管理の協働に関するケアガイドライン」(2024):  
生活期におけるリハビリテーション・栄養・口腔管理の協働に関するケアガイドラインおよびマニュアルの整備に資する研究班, 株式会社医学書院

#### 《8. 提案と発信》

介護予防の重要性が求められつつある現在において、社会参加の理由として人の役に立ちたいという声が多くある。介護予防の三本柱である運動、栄養・口腔管理、社会参加は、三位一体で取り組むべき課題であり、実施することで地域全体の繋がりがや機能維持・向上に繋がりが、地域全体が活性化すると考える。